

手の先天異常 発生機序から臨床像，治療まで

荻野利彦 ● 著
阿部宗昭 ● 監修

〔評者〕石井清一(札幌医科大名誉教授)

平成 27 年の日本整形外科学会総会から帰宅したのは 5 月 25 日であった。そのとき、心臓疾患で療養中の荻野利彦先生の急逝の知らせを受けた驚きと寂しさを昨日のこのように思い出す。

荻野先生が北海道大学に入学し、郷里の静岡から札幌に出てこられたのは昭和 40 年のことであった。下宿が私の家のすぐ近くにあったこともあり、付き合いは学生時代からとなる。先生は医学部を卒業されると整形外科に入局したが、やがて手の外科を専門分野に選び、その中でも上肢の先天異常の研究に情熱を傾けるようになった。その節目、節目に私が関与したことがいま走馬灯のように頭の中を駆け巡っている。

荻野先生が北大、札幌医大、山形大学を通じてライフワークとしてきた集大成となる本書が出版されたのは平成 28 年 10 月である。先生がそれまで経験してきた症例についての膨大な資料を著書としてまとめる仕事に着手したのは、山形大学を退職した平成 23 年のことである。出版を待つばかりの時点で帰らぬ人になってしまったことが悔やまれるが、御親戚にあたる阿部宗昭先生(阪医大名誉教授)が監修を引き受けて刊行に漕ぎ着けた。

手の先天異常は、ヒトの発生の途上において遺伝子の障害、ある

いは外因による胚の外傷が原因となり発生する。発現する形態の異常は多岐にわたっている。臨床医にとって大切なことは、正しい診断の基に治療を開始することである。そのためには、あらゆる手の先天異常に対応できる分類法を確立する必要がある。

Swanson が手の形態異常に発生学の知識を取り入れた分類法を提唱したのは昭和 51 年のことである。その後、三浦隆行先生をはじめ荻野先生ら日本の手外科医たちが Swanson 分類の問題点に改良を加えることで、理想とする分類法の完成に向け努力し続け、現在に至っている。

三浦先生は指の数が不足して発生する裂手症の中に、X 線像を見る限りでは指列の数が正常より多い症例があることを指摘した。荻野先生はこの疑問を解くために「裂手症の形成過程」を想定して仮説を作り上げた。この仮説を実証できる形態異常の存在の有無について、臨床例と動物実験による形態異常指の中から検証した。そのようにして一連の基礎的、臨床的研究で確立された「指列誘導異常」の概念を Swanson 分類に取り入れたのが、日本手外科学会改良分類法である。荻野先生によると、Swanson 分類にはまだ改良を要する点が残されているとのことであった。上肢の掌背方向の重



複異常の分類をどのように整理していくかが今後の課題といえよう。

本書には荻野先生が実際に経験した症例が、日本手外科学会改良分類法に沿ってまとめられている。A4 判で 392 ページに及ぶ単独の著者による大作である。障害児に対する温かい思いやりが随所にあふれ出ている。手の先天異常に興味を持つ臨床医や研究者にとっての格好の専門書として、いつまでも読み継がれるであろう荻野先生の渾身の名著である。

A4・頁 392

2016 年 10 月

定価：本体 21,000 円＋税

[ISBN978-4-260-02441-9]

医学書院 刊